平成6年4月30日

日本細菌学会
関東支部ニュース

第21号

第71回日本細菌学会関東支部総会開催にあたって

総会長　工　藤　泰　雄
都立衛生研究所微生物部長

第71回日本細菌学会関東支部総会を来る6月22日（水)，23日（木）二日間にわたり開催させて頂くこととなりました。

関東支部におきましては，活性化にむけて総会のあり方などが議論されていると伺っておりますが，こうした重要な時期に総会を開かせて頂きますことはまことに光栄でありますと同時に，大きな責任を感じております。

プログラムにつきましては，ここにお届け致しましたように，口頭発表による一般演題の他，特別講演，教育講演及びシンポジウムを各1題用意させて頂きました。企画が私共のカラーである感染症や疫学的な問題に偏り過ぎた感も否めませんが，最近減少傾向にある公衆衛生細菌分野の会員の方々の学会への積極的参加を促すと同時に，細菌学の原点でもあるこれらの分野について見直しを図ることを意図して編成しました。支部の活性化に多少ともお役に立てればと念じております。

特別講演では，新潟大学の藤田恒夫教授に「腸のセンサー細胞と下痢のメカニズム」という題で御講演頂きます。細菌性下痢症は現在も対策の求められる重要な疾病でありますが，先生のこれまで手がけられてきた病原微生物学とは別の視点に立った下痢発現機序へのアプローチは，下痢毒素などこれまで寄生体の面に偏りがちであった下痢研究に新しい刺激を与えてくれるものと期待しております。教育講演では，感染症の把握に不可欠なものとなりつつある遺伝子学的手法に基づく，分子疫学の現状と問題点について，この分野の第一人者として活躍されている順天堂大学の平松啓一教授に解説をお願い致しました。今後の感染症疫学を進める上で示唆に富むお話を伺えるものと思っております。シンポジウムとしましては，最近話題になっている感染症を主題に取り上げて頂きました。取り上げられた疾病は互いに直接関連性がないものではありますが，いずれも新たに認識された感染症として，あるいはリバイバル感染症として現在注目を集めている疾病であり，各演者からその疫学，細菌学を中心に最新の情報を紹介して頂く予定になっております。この機会に議論を一層深めて頂ければと願っております。なお，第一日目終了後懇親会を予定しております（無料)。会員相互の親睦，学問交流の場としてできるだけ多くの方々がご出席下さるようお願い致します。

終わりになりましたが，この機会を与えて下さいました支部長の島村忠勝先生を始め評議員の皆様に厚く御礼申し上げますと共に，会員皆様方の多数のご参加を心よりお待ち申し上げております。

（支部評議員（平成７～９年期）選挙を迎えて

選挙管理委員会委員長　河野　恵

本年は平成７～９年期日本細菌学会関東支部評議員選挙の年です。日本細菌学会関東支部会則「選挙細則」に基づき次期評議員の選挙が行なわれることになります。この選挙のために選挙管理委員会が設置され，河野恵，五十嵐英夫，池田逸夫，島田俊雄，竹田多恵の５名が支部長より委員として委嘱されました。円滑に選挙が実施されるよう委員会活動を行ないたいと思いますので，ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

「日本細菌学会関東支部会則」の一部が改訂（平成２年11月14日）され，その詳細は日本細菌学会関東支部ニュース第14号に掲載されております。また，日本細菌学会関東支部総会の講演抄録（第66回以降）には「日本細。菌学会関東支部会則」として全文が掲載されております。

今回実施される評議員選挙は「有権者名簿（日本細菌学雑誌第49巻３号平成６年（1994）５月の平成６年度会員名簿関東支部に掲載）に対する異議申し立て」の受付（平成６年６月20日），「有権者名簿」と「投票用紙」の発送（同６年７月１日），「単記無記名投票で14名の公選評議員を選出する」ための投票（同６年７月16日締め切り）というのが骨子となります。その後，同６年７月23日に開票，同６年７月25日，当選通知の発送という予定で実施されることになると思います。ここまでで，選挙管理委員会の任務は一応終了することになります。

この一連の評議員選挙が終わったのち，この選挙で選出された評議員（公選評議員）が関東支部長を投票によって選出します。ここで新支部長が誕生することになります。新支部長は７名以内の評議員（推薦評議員）を推薦することができます。また，新支部長は幹事若干名を委嘱することができます。このような経過を経て日本細菌学会関東支部の役員構成は「支部長１名，評議員21名以内，幹事若干名」ということになります。

関東支部評議員会では春秋２回の日本細菌学会関東支部総会を主催するための支部総会長を決定するほか，いろいろと関東支部会員の学術研究をサポートする事業を行なっております。より多くの関東支部会員から支持された評議員により日本細菌学会関東支部の活性化が促されると思います。ちなみに，前々回の評議員選挙の投票率は27.6%，前回は40.1%という結果でした。会員の先生方には日常の研究活動にお忙しいこととは存じますが，評議員選挙にも関心をお持ちいただき，投票をお忘れないようにお願い申し上げます

以下に「日本細菌学会関東支部選挙細則」と「平成７～９年期日本細菌学会関東支部評議員選挙」実施予定表を記しておきます。

●「選挙細則」（平成２年11月14日改訂）

次期評議員の選挙を行なうには，支部長は会員中より５名の委員を委嘱し，選挙管理委員会をもうけ，有権者名簿の作成，選挙期間の決定および選挙を実施する。

評議員の選挙は単記無記名投票で行ない，有効得票数の多いものから14名を当選者とする。ただし，同一機関から２名以上を当選者とすることはできない。得票数が同じで当選者を決定できない場合は籤による。

選挙権者は選挙施行の年の前年の12月末日以前に本支部会員となったもの，また，被選挙権者は選挙施行の年の６年前の12月末日以前より引き続き本支部会員であったものとする。

支部長の選挙は評議員の３分の２以上の投票により，会員中より選び，過半数の得票をもって当選とする。得票が過半数に達しない時は，最も多い得票者２名で決戦投票を行う。もし，得票数が等しい時は籤できめる。

「付則」

本会則は平成３年10月１日よりこれを実施する。

●「平成7～9年期日本細菌学会関東支部評議員選挙」実施予定表

平成6年6月20日（月）：有権者名簿に関する異議申し立て締め切り（必着）

宛先：〒142 東京都品川区旗の台1-5-8
昭和大学医学部細菌学教室
日本細菌学会関東支部事務局選挙管理委員会

平成6年6月25日（土）：選挙管理委員会において異議申し立てを審議し，その可否を決定する。

7月 1日（金）：訂正部分のみを記した名簿補遺と投票用紙の発送

7月16日（土）：投票締め切り（消印有効）

7月23日（土）：開票

7月25日（月）：当選通知を当選者に発送

9月10日（土）：新評議員会

委員会活動報告

学術委員会委員長
野沢龍嗣（静岡県大・食品栄養科学部）

学術委員会は伊予部志津子，奥田克爾，檀原宏文，鶴純明の諸氏と私からなる委員会で，その役目は名前のとおり細菌学会関東支部の学術活動を扱う委員会です。この委員会の仕事の一つは，現在，春・秋2回行われている日本細菌学会関東支部総会の総会長の選考に関する事です。その具体的な手順はおおむね学術委員会で総会長候補者の選考資料を作成し，評議員会での投票で決定されています。従来，総会長は定年間近の先生にお願いする傾向があり，候補者の生年月日が資料となったこともあったようですが，最近では支部総会の活性化という機運が急速に高まって，年齢よりも，支部総会を面白く，新しい企画などで盛り上げてくれることが期待される人を選ぼうとの気配が感じられます。そこで，今期の委員会では評議員に用紙を配り，総会長候補者を推薦理由付きで推薦してもらい，それを参考に評議員会で決定するという方式を採らせていただきました。

また，支部総会についていつも問題となっている点として，現在，春と秋の2回開催されていて回数が多過ぎるのではないかとか，従来，春はシンポジウムだけ，秋は一般演題も含んだ形式であったが，現在の形式と比べどちらが良いか，シンポジウムの内容などは現在は総会長にすべて一任しているが，会員や評議員会の意見も取り入れてもらった方が良くはないかなどなど議論されています。

そこでこういった点を会員の皆様の意見を伺ってみようという事になり，近々アンケート用紙が配られると思います。質問事項にはその他に，支部総会の活性化のために，会員の親睦を深める工夫，若手研究者の意欲向上を狙いとした優秀発表の表彰などの制度について学術委員が乏しい知恵を絞って考えた質問事項も入っておりますのでどうぞ奮ってアンケートに解答して下さるようお願い致します。学術委員会の役目としてアンケート結果から何らかの有意義な提言を纏められたらと願っております。

フォーラム

「漸く三年が経ちました」

信州大学医学部細菌学教室
大西　真

ファルカン新監督の新生サッカー日本代表候補が選ばれた。ドーハの悲劇の後，新監督に選ばれたのは，ブラジル人。84年W杯スペイン大会の掛値なしの輝ける星であり，ブラジル代表チームの元監督でもある人だ。現実を客観的に認識し（今の日本代表チームを指導できる日本人はいない），新しい外部の血を導入することを選んだ日本サッカー協会の選択は正しいと思う。

ここで驚いたことに，彼が選び出した候補者の半数以上は，初代表。もっと近くで見たいと思った選手をピックアップしたとのこと。所属するチームの成績・調子（当然人気）とは無関係に選出したことは新鮮であった。結果がでないと監督の契約の延長及び選手の代表チームへの定着は望めないが…。

大学を卒業して漸く3年。3回目の総会に出かけてきた。やっと知り合いが増え，楽しめるようになってきた。幸いにも他の研究室の先生方にも可愛がられ（と本人は思っている），元気づけられ，満足の行く総会だった。

正直に言うと，支部会に参加したことがない。特別な理由があるわけではない。時間が取れないというのが一番の理由だ。今は机の上の実験の山を片付けるので精一杯。こんな私が望む事と言うと，細菌学会の歴史も，発展の経過も知らないが，ただ，もっと広い範囲で微生物を勉強したいということである。現状でもその機会は用意されているが，更に，他の学会の先生方の話を聞く機会を細菌学会総会及び支部会で増やして貰いたいと願っている。外部のそして新しい人達の力を借りることが望まれているのではないだろうか。

私も何とか時間を作って，未知の世界である今まで参加したことのない学会を覗きに行って，多くの先生方と知り合いたいと感じはじめている。

「カオスの中の情報収集」

東京歯科大学微生物学教室
石原和幸

テレビでは次の首相に誰がなるのかで大騒ぎになっている。自民党一党独裁の頃と異なり強い勢力がいないため，どの候補者も今一つ決め手を欠き混沌としている。私の分野である歯周炎の病原細菌に関する研究もこれに似たところがある。歯周炎の発症にはいくつかの細菌が関与していることは推定はされているものの”この菌が病原体であると”決定されるには至っていない。これらの細菌は完全黙秘はしていないものの，単一細菌で疾患を引き起こすモデルが可能な強い病原因子が認められていないためである。

このような中で病原因子を考えていると行き止まりの袋小路にいるように感じ，気が滅入ってしまう。アイデアが豊富であれば，おのが精神の世界に遊び飽きることを知らないということも可能だろうが，なにぶん常人の悲しさで考えても考えてもなかなか良いアイデアは浮かんでこない。こういう時には他の人，できれば少し分野の異なった人とディスカッションをし，ユニークな意見を取り込みたいところだが，知人は人数に限りがありいつもそうそう適役はいない。学会も良い機会だが，自分の気が向いたときに開いてもらえるものでもない。

一昔前まではパソコン通信といえばコンピュータおたくの専売特許のような雰囲気を感じていたが，最近ではごく一般的な通信手段になりつつある。これとともにE-Mailも急速普及しはじめている。もしE-Mailのネット等を用いた掲示板があれば，お互いの情報交換が非常に容易となり，学会とは異なった形のメディアとなるうるかもしれない。もし，これによってディスカッションが可能ということになれば枯れた泉のほとりで途方に暮れている旅人にも生きる希望がでるのではないでしょうか。

「若手研究者間の交流を望む」

明治薬科大学微生物学教室
松井勝彦

日本細菌学会の会員になって10年になる。最初の6年間は，血清学的診断，感染防御抗原免疫に関する仕事をしてきた。最近は，薬学部出身者としての役割をもっと明確にしたいという考えから，細菌感染における免疫現象を分子間認識として理解しようと努めている。もちろん，最終目標は，レセプターあるいはリガンドの分子構造を基にドラッグデザインを試みることである。しかし，私ひとりの力ですべてを達成するには限界がある。何のために学会で活動するのか。自己啓発ならびに自己研究への批判を研究成果の向上に生かすためであることは言うまでもあるまい。しかし，弱小私立薬大で研究活動を行なっている私にとって最も重要なことは，共同研究者を求めるための最適な場が学会であるということである。実際に自らの手を使って研究に従事しているのは，若手研究者たちである。自分にはないテクニックとアイディアを持っている人達が多数いる。しかし，若者同士が意気投合しても，共同研究に至るまでには，相互のボスの理解が必要となってくる。簡単なようで，これが一番難しいのである。若手が自らのアイディアで自由に仕事をできる体制が一般化すれば，おのずから学会も活発になるのではないかと思う。さらに残念なことに，今の私の目には，細菌学会は医歯学部出身者が中心となって動いており，他学部を寄せつけない封建主義的な体制を残しているように思われる。シンポジウムの内容も，毎年どこかで聞いたことのあるものが多く退屈になってくる。このような学会システムが生み出したものが，若手研究者の研究離れではないか。学会を活発にするために若い人達の参加を呼びかけても，学会の中に若手を中心とした公平な活動の場を提供して頂けなければ本当の意味での活性化にはつながらないのではないか。一日も早く，細菌学会の中にそのような環境ができることを望む。

「多くの分野の若い研究者の参加を望む」

農林水産省家畜衛生試験場
関根　勉

私は，獣医細菌学が専門ですので，獣医学会での活動を初めとして，この細菌学会や他の関連研究会に参加させて戴いております。獣医学会は，動物の疾病に関連する獣医関係のほとんどの分野を含んでいます。そのため細菌学以外の他の研究者との交流が深められるという利点がありますが，反面，同じ専門分野，特に細菌学を専門とする人の数が少なく，この分野の他の研究者との情報交換は，あまり充実しているとは言えません。その点細菌学会が，医学関係を中心に歯学，薬学，理学，農水産学等と多くの細菌学研究者が一堂に会する学会であり，菌種別にみても研究領域別にみてもその研究者の層は厚く，多くの有益な情報を得ることができます。私はこれまで13年以上細菌学会に参加させて戴き，その間に多くの先生方と接する機会を得ました。その中で特に，同年代の他機関の研究者と交流を深めることができたのは，現在の仕事の上でも大いに役立っています。

こういった経験から，敢えて言わせて戴けば，細菌学会が多くの分野の若い研究者がさらに参加しやすい学会になってほしいと感じることです。例えば，病気に直接関係のない菌に関する研究も，その考え方・方法論等参考になる事は多く，基礎微生物学や例えば農芸化学のような応用微生物学に関するシンポジウム等をもっと取り入れても良いのではないでしょうか。一方で，若い人が気楽に参加できるように，例えば，ラフな服装で発表することに違和感のない雰囲気をつくることも大切でしょう。この点では，最近の総会で取り入れられたポスター形式の発表は，大変良い試みだと思います。以前医学領域の学会員の割合が少なくなることを嘆く意見を耳にしたことがありましたが，こういった意味から，また医学以外の出身である者としてからも，むしろさらに多くの領域の研究者が集うような開かれた学会になり，大きく発展していくことを願っております。

「細菌学会を夢の発表の場に」

三共第二生物研究所
宇津井　幸　男

私が細菌（学）に興味を持つようになったのは，小学生の頃，亡父の所蔵していた専門書に載っていた細菌の写真を見たことがきっかけとなっています。ペスト，コレラ，赤痢，チフス，その他の伝染病が細菌によって引き起こされることを知り，自らも猩紅熱で死にかかったこともあって，大人になったら恐ろしい細菌をやっつける薬を研究して命を救おうと子供心に考えたものです。大学では微生物学を専攻し，現在，製薬会社で抗生物質の開発を目的とした研究を行っていますが，幸いにも新しい薬を三つ，世に出す手助けをすることができました。感染症を起こす細菌は当時とずいぶん変わりましたが，子供の頃の夢が少しは叶ったかなと思っています。

細菌学会には学生会員として入会し，以来早いもので22年が経ちましたが，この間に学会出席，時には発表，あるいは学会誌を読むことによって，専門の知識や必要な情報が迅速，容易に得られ，学会に入会している意義はほぼ満たされてきたと考えています。ただ，細菌学会は多岐に亘る分野から多数の発表があるためでしょうか，一般演題の発表時間が短くなりがちで，討論時間はさらに短くなってしまっているように思われます。長年に亘る研究成果の積み上げられた各種シンポジウムを聴講することは大いに勉強になりますが，先を競って発表される一般演題こそ，私にとって関連する研究の最新情報を得られる貴重な機会と申せましょう。しかも，一般演題では時として若い研究者が必死になって研究成果を発表するのを目にしますし，ディスカッションが白熱化して決着のつかなくなる場面もありますが，そのような時にはより一層，研究者，特に，若手にとって研究イコール夢となり，細菌学会，なかでも関東支部では一般演題の発表，討論時間が今よりも延長されて，夢の発表の場になることを希望するものです。

「細菌検査学のために」

三菱油化ビーシーエル化学療法研究室
小　林　寅　喆

日本細菌学会は日本感染症学会とともに永年にわたり日本の細菌学研究の推進に寄与してきた学会で，その功績は高く評価されています。特に近年の細菌学研究の展開はめざましく，先端的な技術による検討が目につきます。反面あまりにも専門化，ないしは特殊化され過ぎて医療の場における細菌学は形骸化している感をうけます。元来，細菌学は臨床材料を含む特定の材料から細菌を分離することから始まるが，いずれの細菌も活動をする"場"をもっています。その環境を離れては本来の生物活性を十分に発揮する事は出来ません。最近の技術革新により細菌は培養をしなくとも，PCR や遺伝的解析によって菌種はもちろんの事，詳細な性状まで調べる事が可能になりました。しかし，ある細菌の特定の性質をクローズアップし，議論をしても，はたしてそれが感染の場にどのような役割を演じているのか，また実際に治療に携わる医師や検査現場の技師たちがどのように応用すればいいのか，疑問に思うことがあります。すなわち特殊化された専門技術が臨床応用への視点を欠いていることがあります。先端技術による高度専門化の方向とはうらはらに，例えばある菌種の培養条件，培地の種類，メーカーの相違による毒素産生性の違い，さらに分類の不統一から異なった菌を持ち寄ってそれぞれ報告し，データの不一致を招いていることなど細菌学の常識から欠落した報告を拝見する事があります。先端技術にとらわれ過ぎて，感染症への細菌学本来の使命を見失っているのではないかと思われることがあります。この種の技術の修得と臨床細菌学者とのフランクな交流や，さらに今後の細菌学を背負っていく若い人たちへの教育にも，先端技術と共に基本的技術についてもっと時間をかけてもよいのではないかと思います。

集 会 案 内

○ 平成6年度日本微生物資源学会第一回大会
日　　時：平成6年5月23～24日（月，火）
場　　所：通産省工業技術院筑波研究センター共用講堂大会議室　つくば市東1－1－4
問合せ先：〒305 茨城県つくば市小野川16－2
国立環境研究所　渡辺　信　☎0298－51－6111

○ 第10回「細菌の病原因子とその分子遺伝学」研究会
世 話 人：国立予防衛生研究所　渡辺治雄
日　　時：平成6年7月22日（金）
場　　所：国立予防衛生研究所東京都新宿区戸山1－23－1　☎03－5285－1111
問合せ先：〒108 東京都港区白金5－9－1
北里大学薬学部微生物学教室　担当：関矢
☎03－3444－6161（内線3321）　FAX 03－3442－5674

○ 第41回毒素シンポジウム
日　　時：平成6年7月19～21日（火，水，木）
場　　所：アルカディア市ヶ谷東京都千代田区九段北4－2－25　☎03－3261－9921
特別講演：アポトージスの機能と分子機構 ――免疫系を中心に――
問合せ先：〒162 東京都新宿区市谷河田町8－1
世 話 人：内山竹彦
東京女子医科大学微生物学免疫学教室
☎03－3353－8111（内線22713）　FAX 03－5269－7411

○ 第5回日本生体防御学会
日　　時：平成6年7月11～13日（月，火，水）
場　　所：こまばエミナース東京都目黒区大橋2－19　☎03－3485－1411
特別講演：Regulation of the host responses to parasitic infection by cytokines and nitric oxide
問合せ先：〒108 東京都港区白金台4－6－1
東京大学医科学研究所細菌感染研究部内
日本生体防御学会事務局　金ヶ崎士朗
☎03－3443－8111（内線313）

○ 第23回薬剤耐性菌シンポジウム
日　　時：平成6年8月25，26日（木，金）
場　　所：伊香保温泉「観山荘」
特別講演：1．内臓真菌症の早期診断の試み，2．小児感染症
問合せ先：〒371 群馬県前橋市昭和町3－39－22
演題締切：平成6年7月1日
群馬大学医学部薬剤耐性菌実験施設　担当：伊予部
☎0272－31－7221（内線2584）　FAX 0272－32－2285

○ 第39回ブドウ球菌研究会
日　　時：平成6年9月8，9日（金，土）
場　　所：大正製薬9ホール　東京都豊島区高田3－24－1　☎03－3985－1133
特別講演：ブドウ球菌のAdherenceをめぐって
演題締切：平成6年6月末日
問合せ先：〒216 川崎市宮前区菅生2－16－1
聖マリアンナ医科大学微生物学教室
☎044－977－8111（内線3539）

議　事　録

第7回評議員会

日　時：平成5年9月18日(土)14時～17時
場　所：昭和大学
出席者：新井俊彦，五十嵐英夫，池田達夫，井上松久，伊予部志津子，内山竹彦，金森政人，黒坂公生，河野恵，笹川千尋，竹田多恵，壇原宏文，野沢龍嗣，辨野義巳，早川勇夫（第70回総会長代理），島村忠勝（支部長），江川清，戸田真佐子（幹事）

議題：

1．第70回総会準備状況報告
　総会長代理早川氏より準備状況の説明がなされた。(別紙)
2．第71回総会準備状況報告
　工藤総会長欠席のため五十嵐委員より準備状況の報告がなされた。
3．会計監査委員の選出
　黒坂，島田両委員が推薦され，満場一致で承認された。
4．平成5年度決算および平成6年度予算案
　若干の修正の後承認された。
5．その他
　(1) 名誉会員又は功労会員に関する原案を小委員会で検討する。
　(2) 学会活性化に関する意見が出された。
　(3) アンケートの項目を笹川委員へ。

第8回評議員会

日　時：平成5年11月5日（金）12～13時
場　所：日本薬学会長井記念館ホール会議室
出席者：新井俊彦，五十嵐英夫，池田達夫，井上松久，伊予部志津子，内山竹彦，金森政人，北野繁雄，黒坂公生，河野恵，笹川千尋，島田俊雄，壇原宏文，鶴純明，辨野義巳，三上翌，早川勇夫（第70回総会長代理），工藤泰雄（第71回総会長），吉田孝人（第72回総会長），島村忠勝（支部長），戸田真佐子（幹事）

議題：

1．会務報告の件
　(1) 会員数の報告後，物故会員に黙禱。
　(2) 平成5年度決算報告。
　(3) 平成5年度決算の会計監査報告。
　(4) 平成6年度予算案の説明。
2．第71回総会準備状況報告。
　工藤総会長より準備状況について説明。
　日時：平成6年6月22日(水)・23日(木)
　会場：北とぴあ　3階　つつじホール
　参加費：正会員3000円，学生会員1000円
　抄録：予約1000円，当日1500円
　特別講演：腸は考える－腸と下痢
　シンポジウム：最近話題の感染症
　教育講演：分子疫学の現状と将来
3．第72回総会準備状況報告。
　吉田総会長より準備状況について説明。
　日時：平成6年11月10～11日（木，金）
　会場：遠鉄ホテルエンパイア
4．小委員会報告
　(1) 事業計画委員会
　　委員長交代北野委員から辨野委員へ
　(2) 編集委員会
　　支部ニュース20号の発行
　(3) 組織検討委員会
　　アンケートの内容決定。

＜人事消息＞

緒方幸雄先生
　杏林大学医学部細菌学を定退職。名誉教授。
河野　恵先生
　東京薬科大学微生物学を定退職。名誉教授。
滝沢金次郎先生
　神奈川県衛生研究所微生病理部長定年退官。
神谷茂先生
　杏林大学医学部細菌学教授に就任。東海大学医学部助教授より。

日本細菌学会
関東支部ニュース
第21号
(1994.4.30)
発行：日本細菌学会関東支部
〒142 東京都品川区旗の台1－5－8
昭和大学医学部細菌学教室内
☎ 03－3784－8131